北海道医報

ISSN 0913-0217　2023.12.1. 第1263号

発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一

発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円（税込）

# 節風季子

# クマの出没と現代社会の問題点

情報広報部長　橋本（はしもと）　洋一（よういち）

今年の夏は例年にない高温で、残暑も厳しく、夏の季節が延長し、その延長の煽りを受けて、秋が短くなり、気候変動も一段階上のステージにあがった感がする。寒暖の差を受けて、一気に紅葉が進み、瞬く間に、秋一色の世界が到来した。まさに童謡の『小さい秋みつけた』がぴったりの世界である。この童謡は詩人のサトウハチロー氏が作詞した作品であるが、サトウハチロー氏は自然だけではなく、年老いて小さくなった母親のことを『小さい母の詩』に書いている。さだまさしの歌《無縁坂》とどこか重なるところがあり、母に対する想いが秋の風景と重なって甦ってくる。

母親は子供を守る存在ということを教えてくれるのは過酷な自然の中で生きる動物たちだ。今年の7月下旬と9月上旬に公用で出かけた道東での隙間時間を利用して、野付半島に足を向けてみた。幸せそうなエゾシカの親子一家をみて、思わずシャッターを切った。内地から北海道一周を目指してやってきた大学生から「このへんはクマに注意した方がいいですよ」と道産子の私が注意されたのには、流石に苦笑せざるを得なかった。

道内のヒグマの数が増えていて、旭山動物園の坂東園長の話によると、総数が約1000頭いるらしいが、なぜここまで増加したのだろう。その大きな要因として個体数の増加と分布域の拡大が考えられるらしい。

本州・四国におけるツキノワグマの捕獲頭数は、1990年代後半から増加に転じ2000年代に入ると一気に増加の一途を辿り2000年以降は捕獲頭数が2500頭を越えるようになった。

1980～1990年代は日本各地で個体数が減少し、分布域も縮小し、絶滅を懸念して、狩猟や駆除を自粛、あるいは禁止の措置がとられた。こういった保護策により絶滅は免れたものの、その一方でクマを取り巻く環境に以下のような変化がみられた。①狩猟者の減少で、クマの増加に捕獲が追いついていない。②人口減少と高齢化で中山間地域における里山の放棄と耕作放棄地が増加し、クマにとって生活圏が増えた。③気候変動により、ドングリの実、山ブドウやコクワなどの食べ物が安定供給されない状況に陥り、本来の生活圏から、さらに人の居住地に降りてくるようになったという3点が挙げられる。

7、8年前に知床のある町の副町長さんから、『今朝、ヒグマがエゾシカを襲って、遊歩道が閉鎖されました。エゾシカを襲うってことはあまりないんですけれどね』とのメールを戴いたことを思い出した。知床にいるヒグマは人に慣れ、不幸な結果が引き起こされたとは耳にしていない。番屋に入ったヒグマが冷蔵庫を開けて、〇〇〇ビールを飲んだといった話を聞いたことがあるが、ヒグマの卓越した味覚に感心したものだ。そういった話がなされるのも、人とヒグマの適正な距離感を構築し、維持してきた漁師の方々の日頃からの努力の賜物と言えるのかもしれない。

ふる里納税で購入した〇〇〇ビールを飲み干しながら、ビールの血中濃度がある域に達したためか、いい気分になって、仲良く一緒に〇〇〇ビールを飲める《くまのプーさん》風のヒグマの存在を期待したが、従来なら、鈴の音に反応して、人とある程度の距離を保っていたクマが鈴に近づいてくるようになったと登山仲間から聞いて当分の間、登山は諦めねばならないと覚悟を決めた。

気候変動、人口減少、そして、高齢化の波はクマの生態に多大な影響を与えているが、我々人類の日常生活にも非可逆的な変化を起こしつつあることを肝に銘じ、現代社会の問題点に対して実効ある対策を立てなければならない。